

第10回ピースポート「旅と平和」エッセイ大賞 大賞受賞作品

Never Again いろいろな言葉にどれだけの重みがあるのだろうか

／三藤紫乃さん（21歳）

アーチ部分に『ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になれる）』と書かれたゲート。かつて何十万人もの人々がぐり抜け、生きて外にできることができなかつたこの門の下を多くの観光客がカメラ、ガイドの声を聞くための無線イヤホンなどを持って元収容所敷地内へと吸い込まれていく。

ここはポーランド、オシフエンチム。ドイツ語名ではアウシュビッツと呼ばれるこの地には毎年100万人もの観光客が世界中から押し寄せる。人類史上、他に類を見ない負の歴史を見るために。私もそんな観光客の一人だ。ただ、他の観光客と違うところがあるとすれば、アウシュビッツ強制収容所訪問がこれで9回目だということだろうか。アウシュビッツにこんなに来る観光客は珍しいかもしれないが、これには理由がある。

ポーランドへの留学、という考えが浮かんだのは2013年の秋のことだった。第2次世界大戦中のホロコーストの歴史を現地で研究したいという思いが私を突き動かした。

そもそのホロコーストの歴史との出会いは私が小学2年生の時にまで遡る。ハンナというあるユダヤ人の少女について書かれた「ハンナのかばん」という本がきっかけであった。同じ年頃の少女が理不尽な差別、暴力に曝され、死んでいくという物語は、8歳の私に強い衝撃を与えた。人間とはこんなにも恐ろしいことができるのかと。

この年にもう一つ私の記憶に残る出来事が起こる。9・11同時多発テロだ。それまで暴力という言葉すら知らなかった私が、人間の負の側面、暴力と迫害、差別とテロという問題に強い関心を抱くことになっていった。

小学生から中学生、高校生から大学生。私は成長し、ハンナの年齢をあっという間に追い越していった。この間私のホロコーストに関する興味関心は消えることはなく、本を読み、夏休みにアンネ・フランクをテーマにして自由研究を書き、ホロコーストに関する展示会や講演会があれば親に頼んで参加しに行った。

大学生になった私は、デイスカッションイベントを開催する学生団体に所属した。団体ではあらゆる社会問題に関して、問題提議を行い議論することができた。

私が選んだテーマは共生社会。グローバル化が進んでいく中で、異なる人種、宗教、国籍を持つ人々が共生することの難しさとその課題を、ホロコーストの歴史という切り口から問いを投げかけた。

そして大学2年生になった私が持った目標がポーランドへの留学であった。ホロコーストの歴史というと、多くの人はヒトラーとドイツを思い浮かべる。しかし、ポーランドは、ホロコーストの影響を受けた広範なヨーロッパの国々の中でも被害者数、収容所数といった点から見て最も深刻な国であった。アウシュビッツツルビルケナウ強制収容所（以下アウシュビッツ）があるのも実はポーランドだ。深刻な被害を被った国として、ポーランドではホロコーストの歴史はどのように捉えられているのか。現地で学びたいと思った私が選んだ道がポーランドでの1年間の留学だった。

初めてのアウシュビッツ見学はただ圧倒されるばかりだった。そこで展示される犠牲者の莫大な遺品や、拷問部屋の展示、犠牲者から刈り取られた髪の毛が生々しく、わずか70年前にその場で行われていた残酷な現実を突き付けられる。自分の気持ちを言葉にしてしまうと今見ている現実を、歴史を陳腐なものにしてしまう気がして、どう表現すればいいのかもわからないくらいだった。

そしてそれ以外のショッキングな光景にも出会った。アウシュビッツではカメラの持ち込みは禁止されていない。撮影に不適切だとされる数か所を除いて、ほとんどの場所では撮影も許可されているからだ。ガイドツアーの最中にも熱心にカメラで撮影する観光客は多い。その中には最近はやりのセルフ用スティックを使って、収容所の建物や敷地を背景にしてポーズを決めながら写真を撮る若者もいれば、撮影が禁止されている髪の毛の展示やガス室内部でも黙々とスマートフォンで撮影を行う人々がいた。そういう人々を見て私は複雑な気持ちになった。髪の毛は遺体の一部であり、クレマトリウム（ガス室兼焼却炉）は被害者の殺害現場であり、そこで亡くなっていった人々の墓場でもある。そこでどれだけ多くの人々が悲惨な目にあったかを想像すればシャッターを容易に押すことはできないと思う。けれども、それができてしまう人たちがいるのも現実だ。ここにアウシュビッツ特有の、それを見る人々の感覚を麻痺させるような特徴がある気がする。アウシュビッツの展示は、見る者の心に深い衝撃と悲しみをもたらす。既存の善悪基準では推し量ることができないあまりにも巨大な死と苦痛を前にして、私たちの感覚は麻痺してしまう。これは、アウシュビッツの収容者が、その絶望的な生活環境にさえも順応していったこととも似ているかもしれない。

ホロコーストを勉強していて恐ろしいと思うのは、自分が他人の痛みにも鈍感になっていると気づくときだ。勉強すれば勉強するほど、私の感覚は麻痺し、写真に写る痩せ細った死体を見ても、以前ほど心は動揺しなくなる。犠牲者の数は数値となり、

大量虐殺のシステムや構造に目を引かれ、一人ひとりの人生に目がいかなくなる。自分の勉強をはじめようと思っただけであった恐怖、異常を感じなくなつた時、私のナチスの生み出したホロコーストという現象に飲み込まれてしまっているような感覚に陥り、ぞっとする。もしかすると、これこそがアウシュビッツの、そしてホロコーストの本当に恐ろしいところなのかもしれない。

だから、一般の観光地にいるときと同じようにして写真撮影をする人々を見ると違和感を覚える。その人たちもアウシュビッツという場所に麻痺しているように見えるからだ。

私たちがアウシュビッツを訪問する理由は様々だ。どんな理由でも私は良いと思う。アウシュビッツという場所に行くことで、感じること、学べるものが多くあり、訪れる価値がある場所だ。ただ、同時にアウシュビッツは戦争、過去の教訓を学ぶきっかけを与える場所にすぎない、というのも事実なのかもしれない。アウシュビッツに行ってもすぐに考え方が180度変わったり、自分というものが変わったりするわけではない。わずか70年前にそこで起こった事を想像し、豊かな文化を生み出し、多くの知識人を輩出したドイツという国が、なぜホロコーストのような悲劇を起こしてしまったのかを考えてみる。アウシュビッツで感じる言いたいような恐怖・違和感を言語化し、自分なりの教訓を見つける。そのプロセスがなければ、アウシュビッツ

に行く意味の大半はないのかもしれない。アウシュビッツで起きたことを他人事にする限り、この歴史から得られる教訓は少ない。

いやそもそも私たちが期待するほどアウシュビッツという場所は特別な場所なのだろうか。ヨーロッパ各地にかつての収容所跡が何十もある。しかしその多くは人知れず、静かに朽ちていくばかりだ。

クラクフにあるプワシユフ収容所もその一つだ。映画「シンドラーのリスト」の舞台になったことで注目されるまで、収容所跡地は戦後ずっと放置されていた。今日でも、そこがかつての収容所であったことを示すのは、それを説明する立て看板と慰霊碑、犠牲者を吊うための十字架のみである。そのプワシユフで問題になっているのが投棄ゴミの問題だ。今日公園のようにして敷地内が解放されているプワシユフには自由に人が行き来できるようになっている。暖かい季節になると、そこでお酒を飲み、お菓子を食べて、散らかしたまま帰る人や不法投棄のゴミを置いていく人々がいる。先日参加した地元住民によるプワシユフ収容所の清掃活動では、10人弱の参加者と2時間の活動で10袋分ものゴミを集めた。かつての収容所跡地がゴミの不法投棄場所になっているという悲しむべき事実について教授に話を聞いてみると、地元住民でさえ、プワシユフがかつてどのような場所であったのかを理解している人は少ないという驚くべき答えが返ってきた。そして、ポーランド中にある多くの収容所跡地、ユダヤ人墓地で似たような出来事が起こっているということも。

規模、収容者の数こそ大きいものの、もともとはアウシュビッツもこうした収容所の中の1つにすぎなかった。今日ではホロコーストのシンボリック役割を果たし、年間100万人以上もの人々を受け入れる負の遺産としてアウシュビッツをつくりあげたのは、アウシュビッツの記憶を後世に語り継いでいかなければならない、ホロコーストの歴史を忘れてはならない、という人々の思いなのだ。私は考えている。そうして、その人々の思いの根底にあるのは「こうした悲劇が二度と起こりませんように」という祈りにも似た願いだ。

けれど世界を見ると、今でも世界中で争いはやまず、偏見や差別がなくなることはない。ホロコースト、というのは600万人もの犠牲者が近代的な技術を用いられながら効率的に殺害されていった前例のないジェノサイドであった。しかし、これは決して極端な例ではない。背景にあるのは、社会に蔓延していた反ユダヤ主義やジプシー（ロマ・シンティの人々）に対する差別意識、知的障害者への無関心な態度だ。こうした偏見や差別は今なお社会の至る所に存在している。私自身の中にもあるだろう。

善悪の所在、人間の生と死、差別・偏見の根深さ、極限状態での人生の選択、近代文明の危うさ……。ホロコーストという事象から得られる教訓には限りがない。二度と悲劇を起こさないためには私に何ができるのか、口先だけの願いにとどめるのではなく、行動と考えでこれからも示していきたい。